

道徳的能力と想像力

大阪大学名誉教授・大阪府登録文化財所有者の会会長

畠田耕一

大阪府教育委員会文化財保護課主査

林 義久

兵庫県立豊岡高等学校教諭

澁谷 亘

(2009年2月5日公開)

1.はじめに

最近毎日のように、個人の道徳的能力や職業倫理を疑う事件の報道に接する機会が増えてきている（参考文献1参照）。科学・技術が進歩し、競争社会の中でいろいろな機械的システムが多様且つ複雑化し、しかも目まぐるしく変化する中で、要求される道徳的能力についても、これまでとは異なる対応が必要になるのかもしれない。あまりにも変化のスピードが早く、それらに直ちに順応できる一部の人はともかくも、多くの人々が今の社会的状況に心身の負担を感じているのではなかろうか。国のあるべき姿としては、精神的にゆとりが持てる、落ち着いた社会の構築が必要と考えられる。

2. 道徳とは何か—道徳的能力の根源は想像力—

しかしながら、どのような状況の中でも、道徳的能力の基本は、人間が他の人々や動植物を含む自然環境に対して、どのような態度を取るべきかを適切に判断する能力であることは確かである。そのような判断を下すには、人以外の動植物やものとのコミュニケーションが出来なければならない。人以外の動植物やものは人間の言葉をしゃべらないので、それらとのコミュニケーションは想像力に頼るしかない。また、社会人として真っ当に生きていくためには、過去に学び、未来を予測することが必要である。そのためには、既に亡くなった人やこれから生まれてくるであろう人の想像力を駆使したコミュニケーションも要求されることになる。

言葉による対話の可能な人との相互理解にも、想像力を働かさねばならないことがある。さらに、自分以外の人や動植物を含む自然環境には、当然、自国以外の国について配慮しなければならないことも含まれている。このように考えれば、道徳的能力を発揮するための根源の力は想像力であるということになる。生きる力の根源は想像力であるともいえる。

それでは、道徳的能力は人間が生きていくうえでなぜ必要なのかを考えて見よう。広大な平原に一人の人間が運転する車が1台しかないのなら、自由気ままな運転を繰り返しても他人に迷惑をかけるようなことは起こりえない。しかし、多くの人がいて、街ができ、道路が整備され、多数の車が動き回るようになると、道路交通法のような法律による人と車の動き方に関する規制が必要になる。全ての人や車が法律を守っていれば問題が起こらないかというと、決してそうではない。たとえ法律に違反しなくても、無理な割り込みや、あまりに遅すぎる運転も、事故に繋がることがある。自分の運転や歩行の仕方が他に与える影響を想像しつつ、動き回ることの出来る判断力が無ければ交通の安全は保ち得ない。ここで要求されているのが人間の道徳的能力である。法律のように外部からの規制はされていないが、してはいけないこと、あるいは、しなければならないことに対する判断力いわゆる自己規制の力が求められているのである。

ある時期、法律に違反しなければ何をしてもよい、たとえ道徳的には首を傾げたくなるような方法でお金儲けをしても、法律に違反していないければそれで良いというような発言が世間を騒がせた

ことがある。一部の人たちはその通りと思い、今もそのように考えている人も多いかもしれないが、これは少し話が違う。法律は善惡の基準の最低線、すなわち、最低限のある一線を定めているのであり、その一線を越えれば罪になるであろう限界の手前部分には、自らが戒めて入らないのが道徳的な生き方である。このような自己規制の効いた行動こそが、優れた想像力を持ち、道徳的能力も高い人間、すなわち品格の高い人間に可能なことではなかろうか。

3. 科学・技術と道徳

道徳的能力のもととなる想像力は、また、創造力の根源でもある。新しく物を創るとき、新しい概念を創り出すときにも、想像力が必要である。先ず、問題とする新しいものや概念にいたる道を、想像で考え、それを基にして実験したり、他人の意見を聞き、議論したりしながら、新しい物や概念を創り出そうとする。うまくいかなければ、また想像力を働かせて別の道を探る。この過程での優れた思いつきや直感も想像力に起因するものである。

このようにして、想像を実行に移し、その成果を検証するという過程を繰り返して、目的を達成し、新しい物や概念を創り出したとき、その人の想像力の集積結果が創造力として評価される。このように考えると、想像力の豊かな人が、善惡の判断基準を正しく持って事に当たれば、道徳的能力も高く、創造力も発揮できる人間という評価を受けることになる。

自然科学の分野では、科学者・技術者の創造力の成果として、新しく生み出されたものや概念は、本来、地球環境を含めて世界の人々の幸せと平和のためにのみ使用されるべきものである。ところが、核兵器のように、一部の国の利益のためのみに利用され、多くの人々を不幸に陥れることもある。このようなことが起こるのを防ぐには、善惡の判断基準をしっかりと持つ、道徳的能力の高い国民の養成のための、たゆまざる努力が不可欠となる。

国際自然保護連合の最近の報告（参考文献2）によれば、世界の哺乳類の4分の1（1141種）が、主に人間活動の影響で絶滅の危機にあり、うち188種は絶滅寸前、29種はもう手遅れの状態ということである（参考文献3）。このような状態を招いたのは、哺乳類の一種である人間の生活活動であり、それに科学・技術が関わっていることも事実である。科学者・技術者の道徳観、倫理観があらためて問われているともいえる。これまでの人間の道徳的なものの考え方があまりにも人間本位の視野の狭いものであった所為でもある。ここで、上記の参考文献3が紹介している本年白寿を迎えた詩人まど・みちおさんの「虹」という詩を記しておく。

虹 まど・みちお

ほんとうは こんな 汚れた空に 出て下さるはずなど ないのだった
もしも ここに 汚したちようほんにんの 人間だけしか住んでいないのだったら

でも ここには 何も知らない ほかの生き物たちが なんちよう なんおく 暮らしている
どうして こんなに汚れたのだろうと いぶかしげに 自分たちの空を 見あげながら

そのあどけない目を ほんの少しでも くもらせたくないために
ただそれだけのために 虹は 出て下さっているのだ
あんなにひっそりと きょうも

まど・みちおさんの豊かな感性と想像力にもとづく、道徳観、倫理観に脱帽である。

4. 善悪の基準を考える

さて、善悪の基準、すなわち、人間がいろいろなことを行うに当たって行うべき判断の基準を具体的に示すのは、かなり困難なことではある。道徳は法律のように外的強制力を伴うものでは無く、個人の内面的な規制を伴うものなので、善悪の基準も人それぞれにより異なるのが普通である。したがって、自分が他に対してどのように振舞うべきかを判断するときに、相手の善悪の基準を、想像力を働かせて考慮しつつ、行動することが必要になる。これは、人々に相当高度で困難な精神活動を強いることになるし、善悪の基準の全てを個人の意思任せにした道徳は社会で機能しない可能性もある。個人の内面的な規制を基本とする道徳の規準にも、ある程度客觀性のある、どのような分野、考え方の人にも共通の部分が必要になる。基本的で分かりやすく一般性のある善悪の基準を作ることは出来ないだろうか。その答えの一つになりうるのが、ロータリークラブの会員が、日常の商取引・産業活動における言行の自己評価のために、使用することを推奨されているテスト形式の規準「四つのテスト」である。

この四つのテストには、人間が社会で生きていくうえでの善悪の判断基準が、ロータリアンのみならず一般の人々にも理解できるような形で、簡潔かつ的確にまとめられていると思う。このテストは、シカゴのロータリアンであり、後にロータリー創始 50 周年(1954-55)に、国際ロータリー会長を務めたハーバート J. テーラーが、1932 年の世界大恐慌のときに考え出したもので、商取引の公正さを測る尺度として、以後、多くのロータリアンに活用されてきた。彼は、1932 年にある会社を破産の危機から救ってほしいと要請され、大不況の中で、低迷している会社を再生させるには、会社の中に、同業者にはない何かを育成しなければならないと考え、その何かに社員の人格と信頼性と奉仕の心を選んだ。そのための指針として、会社の全従業員が使えるような倫理上の尺度として作られたのがこの四つのテストである。

四つのテスト

言行は以下のことに照らしてから行うべし

1. 真実かどうか
2. みんなに公平か
3. 好意と友情を深めるか
4. みんなのためになるかどうか

The Four-Way Test

Of the things we think, say or do

- Is it the TRUTH ?
Is it FAIR to all concerned ?
Will it build GOOD WILL and BETTER FRIENDSHIP ?
Will it be BENEFICIAL to all concerned ?

テーラーの会社の 4 人の部長は、それぞれ宗教的立場が違ったものの、全員、このテストが、自分の信じる宗教に合致するだけでなく、会社や個人の生活にも模範となる価値観を与えてくれると理解し、やがて、四つのテストは、仕事のあらゆる面における指針となった。その結果、信頼と好意の雰囲気が、取引先や顧客や従業員の中に育まれ、会社の業績が次第に好転し、5 年後の 1937 年までに 40 万ドルの負債は利子とともに完済されたという。また、このテストによって自分の生き方が変わったと述べる手紙が数えきれないほどテーラーのもとに寄せられたということである。

四つのテストを提示された四人の部長がこれに賛同したのは、四人の部長のそれぞれに異なる宗教理念が、この四つのテストに合致したからとも理解できる。たとえ一人でも、その宗教理念に合致しないものが含まれていると考えれば、このテストは成立しなかったかもしれない。宗教の力は大きい。歴史を顧みれば宗教戦争は枚挙に暇がないことからも、人々に根付く宗教の影響力の大きさが分かる。このような観点からも四つのテストは人類普遍の、道徳的基準であり、換言すれば善

悪の判断基準といつても良いと考えられる。

この四つのテストは、本来、商取引の相手やその関係者に対処するための指針として作られたものである。しかし、それぞれの意味をよく考えて見ると、日常生活を道徳的に生きるための優れた指針でもあることが分かる。まず、「真実かどうか」は「嘘偽りがないかどうか」というように単純に解釈するよりは、もう少し深く考えて、「物事の原理・原則、根本原理に適っているかどうか」と理解するのがよい。今の社会、物事の根本原理をおろそかにし、対症療法に走ることが多すぎると思うからである。

「みんなに公平か」は自分以外の人や動植物やものに対して、その場の状況に応じて、私的的感情をあまり交えずに、偏り無く対処しているか、という意味なので、「みんなに公正か」という方がよいのかもしれない。真実は、後で述べるように、時として信念の要素を含むことがある。それが相手を困らせることが無いような配慮も要るということを、言外ににじませているとも言える。

「好意と友情を深めるか」は、「自分の考え、意見、行いが他との好意・友情を一層密にするか」という問い合わせであり、自分以外の人や動植物やものと付き合うときの、ごく自然で基本的な対処の仕方である。ここではある程度の私的な感情がまざるのはやむを得ない。大事なことは、それが他を排除するものであってはならないということである。

道徳的な基準は、自分が何かを行うときの他への態度の規範であるが、それは当然、相手もそれに反応しやすく、何かを行いやすいための配慮を含んでいかなければならない。これが「みんなのためになるかどうか」であると考えられる。「好意と友情を深めるか」の判断で私的な感情が強く入り過ぎないように戒めているという解釈もできなくは無い。

このように考えると、四つのテストは、短い言葉を組み合わせ、互いに相補わせることによって、実際に上手に、道徳的規範という、考え方によっては堅苦しいことを、やさしく、穏やかに述べていけることが分かる。大事なことは、四つのテストのそれぞれを個別のものとは考えずに、全体を一つに融合したものと捉えて、自分の言行を判断することである。

最近、筆者の一人（KH）が、ある中学校の3年生100余名に、約2時間をかけて、ここまでの大略を話す機会があった。生徒たちは、普段の道徳の授業とは様子の違う話に、ある種の驚きと戸惑いを示しつつも、熱心に聴いてくれた。その時の生徒の感想・意見を読むと、20%近い生徒が「四つのテストは善悪の基準として納得のいくものである」という意味の反応を示していることがわかった。

「道徳とは何かという話は、考え方の根本的なことで、とても参考になりました。特に、四つのテストは善悪を判断する基準として、とても分かりやすくて、日常生活にあてはめて考えることができます。『何のためにこれをやるのか』という答えを出すことができると思います」

という意見からは、このテストが中学生にも訴える力を持っていることが分かる。

「善悪の判断、区別というのも難しいと思いました。『みんなの役に立つ』というので、大多数の人には役に立つが、ごく僅かの人には役に立たない場合には、それは善なのか悪なのかどちらなのか悩みました。先生はどっちだと思われますか」

という生徒とは、是非もう一度会って話をしたいと思う。

5. 真実とは何か

ここで、四つのテストの起点となる「真実かどうか」の真実について少し考えてみたいと思う。

真実は、上にも述べたように、物事の根本原理、すなわち、互いに関連するいろいろな事実をうまく説明できる、あるいは、それらと合致する考え方である。事実はそれを認知・観測する方法が同じであれば、何処で、誰が、何時、認知・観測しても同じであるが、真実は必ずしもそうではない。時の経過とともに多くの正確な事実が蓄積されると、それらをつかさどる根本原理も少しづつ深まっていく。真実は時代とともに深化していく。自然科学の分野に例をとれば、化学の根本原理である「物はすべて分子という非常に小さい粒子から出来ている」という自然学者でない人達でもよく知っている分子の概念も、それが提唱されたときから現在までの間に、多くの実験事実の積み重ねによって、非常に精緻なものとなってきた。

真実は、また、人によって異なることもある。同じ事実を知ったとしても、その人の経験や洞察力によって、それらを統一して説明できる概念、すなわち抽出できる根本原理、真実が若干違うこともありうる。その意味で、真実はその人の信念、あるいは、確信の性格を持つこともある。事実は、また、場所による偏りを示すこともある。したがって、それに基づく真実も場所によって多少の違いが出てくることになる。真実は、それに関わる人、時代、場所とともにある種のゆらぎを示しつつ、次第に深まり、最終的には唯一つのものに収斂していく筈のものといえる。したがって、社会における行動の規範も、唯一つのものではなく、人、時代、場所とともにある種のゆらぎを示すものということになる。

人は、道徳的判断が自己の信念のかたくなで偏狭な押し付けにならないように、冒頭で述べた、想像力を駆使し他人との情報交換、今日の前にいる人だけではなく、既に亡くなった人やこれから生まれてくるであろう人をも含めた人達とのコミュニケーションを通して、その道徳的能力を深めていかなければならない。

6. 近江商人の商業理念「三方よし」と人と人との信頼関係

四つのテストは、昭和初期のシカゴでの経済発展の裏で起こった、商業道徳の欠如から考え出されたものであるが、日本でも、これを遡る江戸時代の商取引に、この四つのテストに大略共通する考え方があった。それは、近江商人の商業理念であった「三方よし」である。

「三方よし」とは、売り手よし、買い手よし、世間よしの3者が良いことを指し、物を売る行為は、売る側だけでなく、買う側も、そして世間(社会)も良くなければならぬ活動・行為であるとの考え方である。近江の商人は滋賀県(近江)を拠点にして広域的な商いを行なった商人で、上方の商品を売ると同時に地方の物産を仕入れたり、また別の地で店を構えて売るなど、全国各地で商売を開いて歩いた、基本的には行商人である。その発祥は中世にまで遡り、知らない土地での商取引に際しては、「信用」が極めて大切であったことから、このような考え方が確立されたものとされている(参考文献4参照)。

近江商人の商人道にも、篤い信仰心が関わっていたとされている。参考文献4では、近江商人は、諸国行商に際しての身の安全等を祈願して道中厨子を持ち歩き、その信仰する宗教宗派も、浄土宗、天台宗、禪宗をはじめ、神道や儒教、加えて先祖崇拜が加わり、神仏への信仰と同時に先祖崇拜が渾然一体のものとして扱われていたとされている。一方、近江商人の遺言書の中には、過度な信心や学問への傾倒も戒めており、度が過ぎると正体のつかめない異様な人間になるとして、家業を粗略にして多大の財産を神社仏閣に喜捨することは、いたずらに僧尼を堕落させるだけであるという極めてバランスの取れた合理的な見識をもっていたようであり、現代人が見習うべき部分が多い。「信用」、すなわち人を信用する、人から信用されるという信頼関係は、一人で生きていくので

あれば必要ないかもしれない。しかし現代のように、いくら人間の周辺環境が便利になり、多くの事柄が人の手を煩わすことなく処理できる時代になっても、まだまだ人間どうしの信頼関係の上に成り立つ事柄は多いと言わざるを得ない。ただ、科学・技術の発達と平行して、特に戦後のように、がむしゃらに進めてきた経済発展の中では、経済合理性の名のもとに、人間関係の機微に関わる部分を希薄にしてきたきらいがある。

戦後の日本には、高度経済成長の中で、個人主義が普及し、多くの国民が確たる宗教規範を持たない状態で、拝金的な考え方がはびこり、現在のような道徳理念の希薄な状況に至ったのではないか。さらに、科学・技術の進歩した現在のわが国では、科学万能を唱え、科学的に正しいと判断されるものは全て正しく、そうでないものは迷信と決め付けて、全てに対して畏怖の念が希薄になってきているように感じられる。このような現代の日本人に対して、どのようにして道徳を説くかは至難の技と言うべきなのかもしれない。

7. 子供たちに如何にして道徳を説くか

さて、昨今の大人社会における道徳規範の衰退は、子供にも大きく影響している。将来を担う子供達には、遅くとも幼稚園の段階から、真の道徳的能力を養成するための教育を始める必要がある。初等・中等教育における想像力の開発、道徳的能力の開発が特に重要である。さらに大事なことは、子供たちの豊かな想像力を、道徳的能力の開発、創造力の發揮に繋げる教育的配慮、措置、授業が欠かせないということである。

その最たるもののが、総合的な学習の授業である。自分の周囲からの問題発見は想像力なしには出来ないし、問題解決の過程も想像力の開発に役立つ。そして、たとえ小さな問題でも、自分が選んだ問題が解けたとき、子供たちは、そこに達成感とともに、自己の創造的な能力を実感できるはずである。創造力に繋がる豊かな想像力を備えた国民の養成に、総合的な学習の授業の果たす役割の大きさを、教員、保護者、一般市民はもっとよく認識すべきであろう（参考文献5）。

社会の一員たる親が子供に及ぼす教育上の影響は大きい。現在の日本では、子供の教育を学校や塾に任せきりにしているきらいがある。心のゆとり教育や総合的な学習の場は本来家庭にあるべきものである。家庭の文化・教育力は学校での総合的な学習に寄与し、また、総合的な学習を子供と親が共に行えば、家庭の文化・教育力が向上することは間違いない。家庭の教育力なしに、学校教育は成り立ちにくいことを知って欲しいと思う。

ところで4節で述べたように、中学校での道徳についての出前授業では、生徒たちの多くが話を真剣に聴き、考えてくれた。

「講義を聞く前は、道徳は人の道だとしか思っていなかったが、想像力という言葉を聞いて、ああ、こんな考え方もあったのだと改めて納得できた。最初は道徳と聞くだけで頭がこんがらがるような哲学的な難しい印象だったが、先生の話から、いろいろな教科や物事でも道徳で繋がっているのだという新しい見方ができるようになった」。

「道徳、その言葉を聞いて私が今まで思い浮かべていたのは、マナーとか人間関係とか、相手を思いやるとか・・・。畠田先生のお話を聞いて一番印象に残ったのは、『道徳には想像力が必要』ということです。考えてみれば、マナーに関する、相手を思いやることにしても、それを行動に移すまでには、『あの子がいやな思いをするかもしれないからやめておこう』、『こうすればあの人は喜んでくれるかなあ』と無意識のうちに頭の中で想像していたのだ、ということに気付きました。相手が人間であっても動物や植物であっても、相

手のことを全て理解することは不可能です。でも相手のことを想像して、自分がすべき行動をおこせば、不可能なりにも、相手のためにできることはたくさんあります。『想像する』すごく簡単なことだけれど欠かしてはならないことだと思いました」、

「一部の利益だけを考えず、みんなの利益になるように想像力を働かせるようにすることだと学びました。人の話を聞くにしても常に頭を働かせることも学びました」、

「作文だと絵だと、難しい問題を解く時だと、投げ出してしまったことが多々あるのですが、そういうところにも魅力は潜んでいますし、内容を一生懸命想像することが難しくても、そこに楽しみを見出して、道徳する機会がいくらでもあるのに、それをしないというのがすごく勿体ないと思いました。いろいろな創造に挑戦することも道徳につながるのかなとも」、

などの感想からは、彼らの真面目さ・真剣さが読み取れる。

「創造力は想像力からできているということから、僕は、想像力プラス好奇心が必要かなと思います。いつも意識して好奇心を持つようにいるのですが、無理に好奇心を持とうとしても、すぐに無くなってしまいます。今回、好奇心だけでなく想像力を加えることで、それを防げるような気がしました」、

「『道徳とはなんぞや』という問いに、『そういえば道徳って何やろう。なんやわからんまで、道徳の授業に出てたんか』と思いました。そして続けて、『じゃあ数学ってなんやろう』と思うようになり少し考えさせられました」、

「想像力から創造力が生まれるというところで、想像力をつけてゆくには、僕は読書が一番かなと思いました。理由は例えば物語文を読んでいる時は情景を想像したり、論説文などでもその本に対して自分の意見を考えたりします。それによって自分で考える能力やそれまで知らなかつたような知識がついてきて、想像力の幅が広がると思うからです。だから昨日の講義を聞いて、読書の機会もどんどん増やしていくこう思います」、

などの意見からは、生徒たちが筆者（KH）の道徳についての話を真剣に聴いて、誠実に応え、道徳のみならず、いろいろなことを詳しく考える切っ掛けをつかんでくれたことが分かり、非常に嬉しく、彼らに感謝し、心強く思うとともに、このような出前授業の必要性とそれを行うことの責務を痛感している次第である。

8. 子供たちの豊かな想像力を道徳的能力につなげよう

子供たちの豊かな想像力を道徳的能力につなぐ上で大事なことは、善悪の基準をいかにして学ばせるかということである。これは、数時間の授業を集中的に行えば済むと言うような、生易しいものではない。何時も子供たちの近くにいてロールモデルとしての役割を果たすべき教員や親が、社会の人々や自然環境に対して人間のとるべき態度、すなわち広い意味の道徳について独自の確固たる哲学・判断基準を持ち、それを子供に伝え、体験的に考えさせる努力を気長に行うことが一番大切である。このような努力は、小学校入学以前の幼児期から始める必要がある。ところが、この時期の親は子供を健康な状態で成長させることに精一杯で、しかも子育てという、生まれて初めての仕事をするわけなので、道徳的能力の涵養にまで思いの及ばないことがよくある。子供が大きくなってからそのことに気付くのである。

祖父母と一緒に住んでいたころは、彼らの長い人生体験に基づく反省と知恵が孫に及んでいたの

であろうが、今は核家族化によって、家庭のそのような教育力が失われている。大家族制の頃に子供に作用していたこのような家庭の教育力は、何らかの工夫によって、是非とも取り戻しておきたいものである。また、子供を核家族化した家庭内に閉じ込め、親の手厚い庇護の下に置きすぎると、上記の自動車の例からも想像していただけるように、道徳的能力が育ちにくい。子供を家族以外の適当なストレスのかかる場に置いて、それに対応する能力を養わせるのも大事なことである。ストレスフリーの環境では想像力も道徳的能力も育たないような気がする。

9. ゆとりの教育と生涯学習

国民全員が生涯学習を心がけ、これを成立させるのにも経済力一辺倒ではなく、ほどほどの経済力の上に成り立つ、時間的ゆとりが必要である。家庭の文化的環境を良くし、教育力を高めることがひいては地域の文化・教育力を高め、子供に道徳的能力を基礎とする生きる力を養わせることとなる。成績や習熟度などにこだわり、他との比較ばかりしては子供に無用の挫折感や喪失感を植えつけてしまうことになりかねない。子供とのかかわりの中で親がわが子の良いところを見つけ、認め、伸ばしていくことが大切である。そのためには、理論・理屈の左脳だけではなく、親も子供と一緒に自然の美や神秘に対して心の琴線をふるわせる右脳を刺激する時間の余裕を常に持ち、豊かな感性・情緒力を養いたいものである。「ゆとりの教育」は子供だけではなく、親や教員にもゆとりある心を養う時間を持つことを求めているといえる。全国学力テストのような方法で判断される学力を問題にして、やたらと騒ぐ前に、生きる力の根源である道徳的能力の養成を学校教育において、如何に行うかを論じるべきときである。ここで、前節の最後に述べた「ストレスフリー」と「ゆとり」とは根本的に異なるものであり、この二つを混同してはならないことを、あえて付け加えておきたい。

10. 大人も子供と一緒に根本原理を考えよう—先生を含めて全ての大人にお願いしたいこと—

出前授業で小学生に「勉強は何のためにするの？」と聞くと、「大きくなつて、人のためになるような仕事をしたいから」というような答えが結構返ってくる。ところが、高校では、「良い仕事に就くため」、「思うとおりの会社に入るため」、「良い大学に入るため」というような答えしか聞けないことが多い。小学生から高校生になる間に、将来を見通す能力、つまりある種の想像力がここまで近視眼的になるのか、近未来の予測しかすることが出来なくなるのかと、慨嘆せざにおれない。小学生の好奇心をも含めた想像的能力をここまで貶めるのが受験勉強かどうかは別としても、その原因のかなりの部分が親と社会にあることは間違いないように思う。また、教師も教科の授業を行う際に、「役に立つか立たないか」という実利主義的な観点からのみで教材の指導を行ってはならない。教科教育、ひいては学問において、実利としての部分はもちろん重要である。しかし、その根底としてそれと同程度に、またはそれ以上に重要なこととして、根本原理の理解がある。その教科の根底に流れる哲学・哲理の理解といつても良い。学校教育ではむしろその哲学・哲理すなわち根本原理を徹底的に教えなければならない。根本原理の理解こそが、単なる空想に近い想像を集めし、創造力へと統合していくための原動力となるものである。現在の学校教員の大半が、いわゆる受験戦争という言葉が生み出された頃に学生であった世代である。教員自身が、自分の専門とする教科に対する教科観をしっかりと持たねばならない。その教科の実利部分のみをもって、自らのごく近い将来に役立つかどうかを判断の基準にして教育をすれば、前述の高校生のような人を多量に作り出すことになりかねない。受験や就職に必要だから勉強する、不要だからしなくてもよいとい

う教育は決して行ってはならないが、残念ながら社会、保護者、教師、そして子ども自身が4つのテストからはかなり離れた判断基準でもって教育を行い、あるいは、受けているといわざるを得ない現状ではなかろうか。このような観点に立って、教育を見直せば、道徳的能力を高めることに寄与できるのではなかろうか。一般市民の継続教育に力を用いつつ、十数年後には成人するはずの児童も含めた子供の教育に更なる力を用いることが、今の日本を新しく変革・発展させる道と考えられる。

参考文献

(1) 畑田耕一、林義久「登録文化財建造物の住育力と道徳教育」(2008.5.22)

<http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/tohroku-dohtoku.pdf>

(2) "The Status of the World's Land and Marine Mammals: Diversity, Threat, and Knowledge" Jan Schipper(E-mail: jan.schipper@iucn.org) et al., Science, Vol. 322.No. 5899, 10 October 2008, pp. 225 - 230

(3) 「天声人語」、2008年11月15日、朝日新聞朝刊

(4) 末永國紀「近江商人」(中央公論新書 2000. 5. 25)

(5) 畑田耕一、瀧谷亘、矢野富美子「これからの日本の教育 (2006.8.15)」

<http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/bun19.html>

著者プロフィール

畠田耕一：昭和32年大阪大学理学部化学科卒業、大阪大学名誉教授。大阪府登録文化財所有者の会会長、豊中ロータリークラブ会員、専門は高分子化学、小・中・高校への出前授業にも取り組む

林 義久：昭和48年関西大学大学院工学研究科修士過程修了。奈良県文化財保護課を経て平成2年より大阪府教育委員会事務局文化財保護課主査（建造物担当）

瀧谷 亘：平成14年大阪大学大学院基礎工学研究科博士前期課程修了。兵庫県立淡路高等学校教諭を経て平成19年より兵庫県立豊岡高等学校教諭